ニュースレター
熊本乃地名

発行者 熊本地名研究会
会長 木﨑康弘

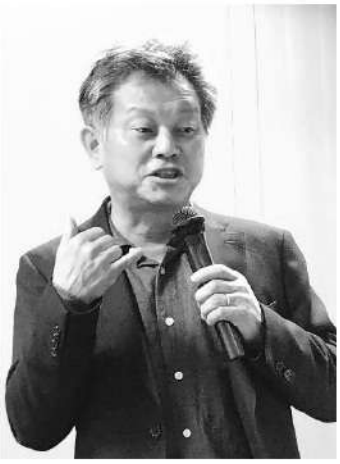
題字 松野国策 書

あらゆる地質が揃う球磨

特徴ある4つの山 遙か南の海から岩石も

村本 熊本地学会副会長が講演

熊本地名研究会の3月例会は22日午後1時30分から熊本市のパレアで開き、「人吉球磨の地質・地形よろず話」と題して熊本地学会副会長で山江中校長の村本雄一郎氏が講演した。村本氏は、自身が地質や地形に関心を持った経緯や自然災害との向き合い方から説き起こし、特異な構造を持つ人吉球磨の地質について詳しく説明するとともに地学研究の面白さなどを語った。講演後は質疑応答を行い、多くの質問が出された。この日の参加者は16人だった。

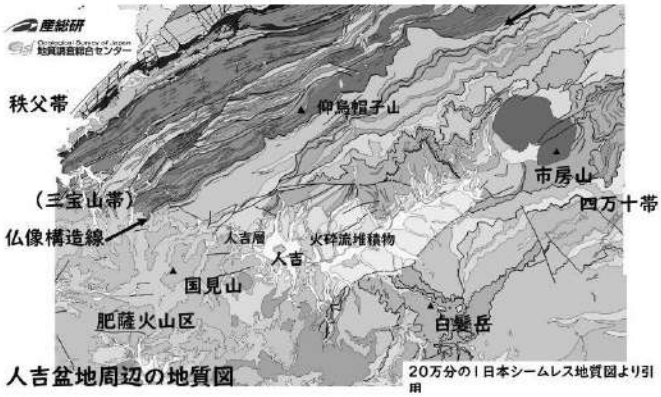

講演する村本氏

村本氏の講演要旨は次の通り。【報告者・藤野】

地学の研究団体に属していることから、被災地の視察に行くことも多い。以前は、被災者への気遣いから「悲惨な光景は見せてはいけない」「写真は撮るべきでない」と思っていたが、ある時、現地で「後世のためにもありのままを見せて、きちんと伝えて」と言われて、考えを改めた。事実は事実として情報をたくさん集め、仮説を立てて議論していく。そして意見を出し合うことで真実に迫っていく。こうした態度が自然科学を理解するうえで必要なことだと思っている。これは地名を研究されている皆さんにも当てはまるものだろう。

私の専門は火砕流の研究だ。平成3年の雲仙普賢岳の噴火の時は教師2年目で、あの大火砕流が発生する1か月ほど前に現地に行って写真を撮っていた。当時は火砕流と言っても、多くの人がどんな現象なのかよく理解してないような状態だった。指導の先生からは大学院への進学を勧められていたが、家庭の事情もあり学校の教師になることを決めていた。もし、大学院に進学するつもりだったなら、あの日も現地にいたはずで、火砕流で命を落としていたことだろう。

人吉球磨はその地形から土砂災害の多い所だ。球磨村神瀬の球磨川左岸に川に向かって出っ張った場所がある。最初は人工物かと思ったが、よく見るとそうではなく、土石流の跡のように思われた。現在は、グーグル・アースという便利なものがあって、空撮によって地形の様子が見られる。それで確認すると、その出っ張りのある左岸上部には尾根で囲まれた内側にいくつかの谷筋があり、それが下部で1か所に集まり、川に土砂を押し出し出来た地形だということがわかった。



4つの山の位置と人吉盆地周辺の地質図

昭和38年には三八水害という豪雨災害があり、五木村で小学校が流されるなど大きな被害が出た。この時の時間雨量は最大で140㎜という大雨だった。横手地区では山津波が発生し、23戸をひと呑みにした。ここも航空写真で確認すると、2つの谷から土砂が押し出したことがわかる。土砂の量は大変なものだったようで、川辺川の流れまで変えたほどだったという。崩れた谷の上部は地区の人から、かつて「ババ落とし」と呼ばれていた場所だった。

さて、本題の人吉球磨の地質概要だが、ここは古生代から新生代まで全部の地質がそろっている。人吉市から見える代表

（2ページに続く）

地名研究会 告知板

5月 行事日程

- 城下町歴史散策「清正公縁の通りをさるく」
  5月2日(土) 午前8時40分集合・熊本駅白川口広場
- 例会 「球磨盆地の地名よもやま話」
  人吉史談会代表・大平哲也氏
  5月31日(日) 午後1時30分～ パレア会議室9
- 勉強会 テキスト「地名の研究」柳田國男著
  5月9日(土) 午後1時30分～ パレア会議室5

＊地名研ブログでも会の活動や関連ニュースを発信中